

平安宮中務省跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一〇―一

平安宮中務省跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平 安 宮 中 務 省 跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、マンション建設に伴う平安宮跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

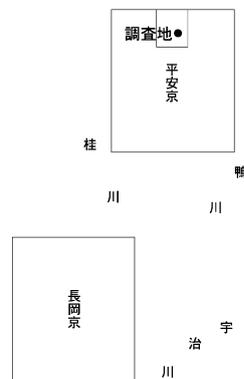
平成 22 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮中務省跡、聚楽遺跡
- 2 調査所在地 京都市上京区下立売通千本東入中務町 486 番 31 他
- 3 委 託 者 藤和不動産株式会社 取締役社長 八木橋孝男
- 4 調査期間 2010 年 4 月 5 日～ 2010 年 4 月 30 日
- 5 調査面積 200 m²
- 6 調査担当者 大立目 一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類別に番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 大立目 一
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 1区 第1面 江戸時代後期	6
(3) 2区 第1面 平安時代中期以降	9
(4) 2区 第2面 平安時代前期	12
4. 遺 物	15
(1) 平安時代中期の遺物	15
(2) 平安時代前期の遺物	15
(3) 瓦類	17
(4) その他の遺物	18
5. ま と め	19

図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区 第1面全景 (東から)
	2	2区 第1面全景 (東から)
図版2 遺構	1	2区 第2面全景 (東から)
	2	溝28 (北東から)
	3	柱穴13 半裁断面 (北西から)
	4	柱穴14 半裁断面 (北西から)
	5	柱穴18 半裁断面 (北東から)
図版3 遺構	1	柱穴22 半裁断面 (北から)
	2	柱穴13 完掘 (北西から)
	3	柱穴14 完掘 (北東から)
	4	柱穴18 完掘 (北西から)
	5	柱穴22 完掘 (北西から)
	6	柱穴18 抜き取り穴B (北東から)

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（東から）	2
図4	作業風景（西から）	2
図5	周辺調査位置図（1：1,000）	5
図6	1区第1面平面図・西壁断面図（1：100）	7
図7	1区北壁断面図（1：100）	8
図8	土坑50実測図（1：50）	8
図9	土坑58・61（北から）	9
図10	土坑58・61断面図（1：50）	9
図11	2区第1・2面平面図（1：100）	10
図12	2区南壁断面図（1：100）	11
図13	2区西壁断面図（1：100）	12
図14	ピット7・8実測図（1：50）	12
図15	ピット38・16・15断面図（1：50）	12
図16	溝28・土坑27実測図（1：50）	13
図17	建物1東西柱穴列実測図（1：50）	14
図18	整地層出土土器実測図（1：4）	15
図19	整地層出土白色土器	15
図20	土坑27・溝28出土土器実測図（1：4、1：2）	15
図21	建物1柱穴出土土器実測図（1：4、1：2）	16
図22	建物1出土赤色顔料付着土師器	16
図23	平安時代の瓦拓影・実測図（1：4）	17
図24	桃山時代の瓦拓影・実測図（1：4）	18
図25	桃山時代の瓦	18
図26	埴実測図（1：6）	18
図27	凝灰岩実測図（1：4）	18
図28	中務省域内の遺構配置図（1：400）	19

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	4
表 2	遺構概要表	6
表 3	土器一覧表	17
表 4	遺物概要表	18

平安宮中務省跡

1. 調査経過

当調査地は京都市上京区下立売通千本東入中務町 486 番 31 他に位置しており、北は丸太町通、西は浄福寺通に接する、元京都市内職補導センター地内である。調査地周辺は縄文時代から古墳時代の集落跡である聚楽遺跡とともに平安宮内にも含まれる地域で、これまで当地周辺で行われた多くの調査で古墳時代から平安時代の遺構が良好に遺存していることが確認されている。特に平安宮の中務省に関連する遺構成果が多く得られた場所となっている。中務省は朝堂院の東、内裏の南に位置する律令制の八省官衙の一つで、詔勅の文案を審議、上表文の取り次ぎなど天皇の秘書的な役割を担った官庁である。他にも国史編纂・諸国戸籍、租調管理など多岐にわたる内廷機能を職掌としている。陽明文庫「宮城図」によれば中務省内は職掌により、中務省正庁・陰陽寮・内舎人・監物・鈴鑰などに区画されていたことが示されている。後に中務省を含む諸官衙は、律令制の形骸化と共に平安時代後期から鎌倉時代には廃絶を迎えることになる。そしてこの辺り一帯は「内野」と称される空闲地となっていた。再度開発されるのは江戸時代に入る慶長5年(1600)、二条城北側に京都所司代下屋敷が建てられる頃となる。そして明治3年(1870)、その跡地は京

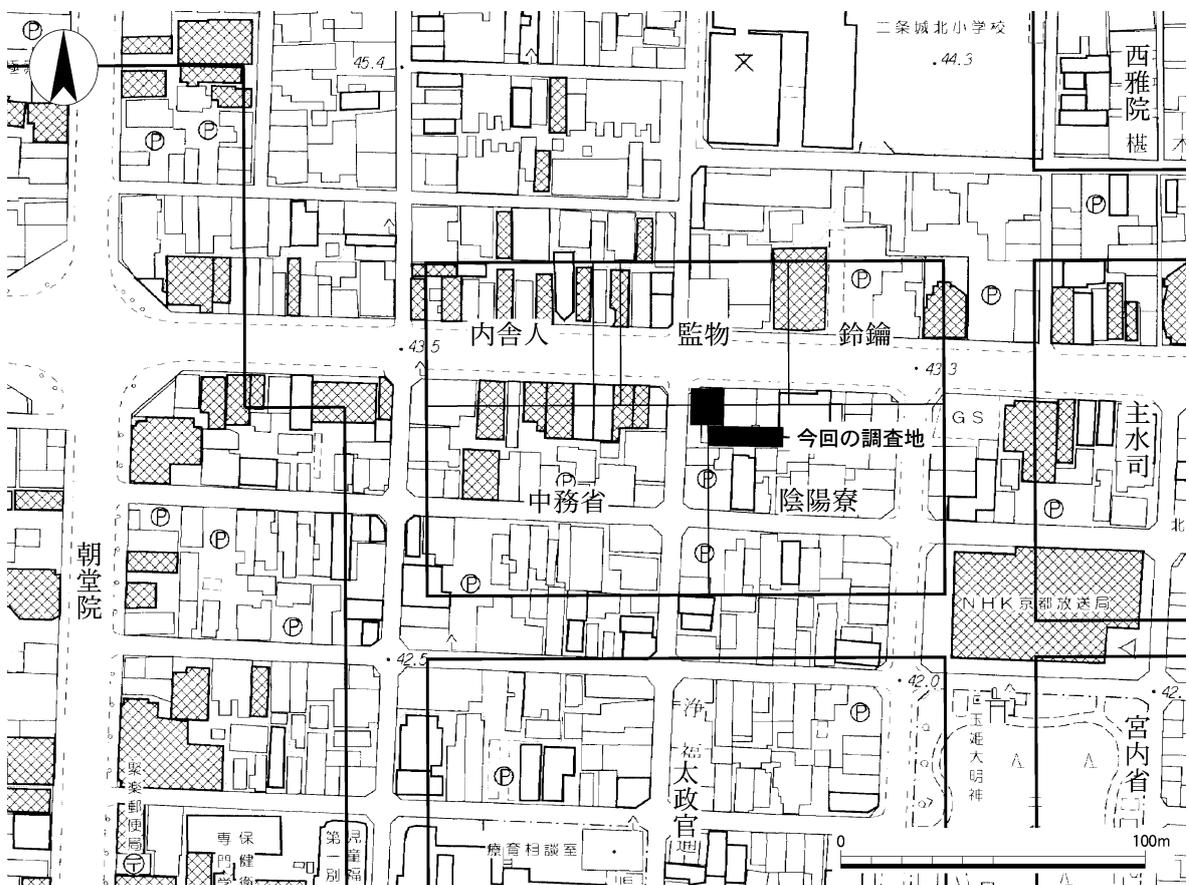


図1 調査位置図 (1:2,500)

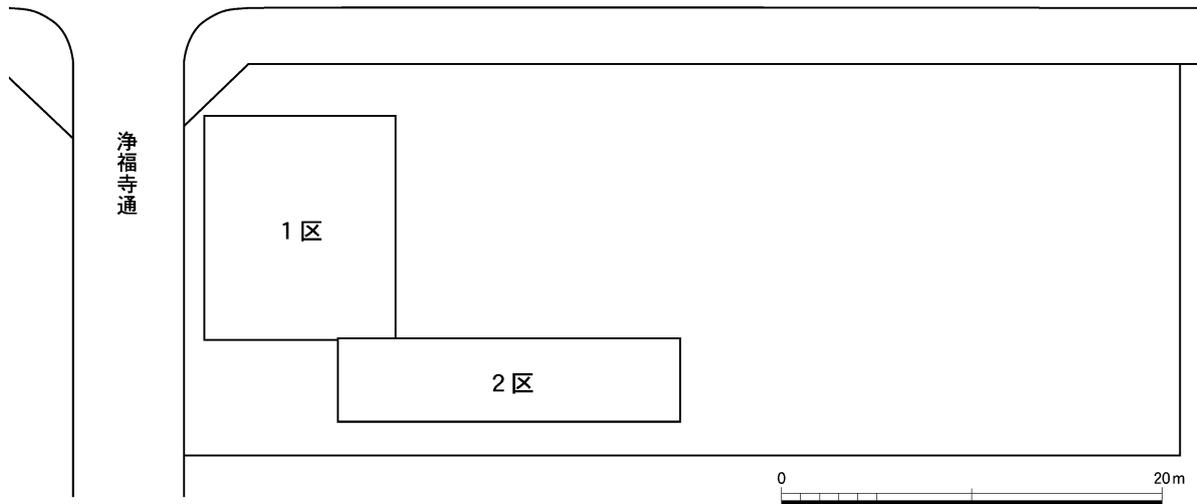


図2 調査区配置図（1：400）

都監獄に引き継がれ、昭和6年に監獄が山科に移転した後は、周辺に町屋が形成され現在に至っている。

今回調査地にマンション建設の計画が立てられた。そのため工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という。）が建設予定地に4箇所の試掘トレンチを設け、遺構の遺存状況を確認した結果、平安時代の整地層、柱穴が確認された。これらのことから京都市文化財保護課の指導の下に、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け発掘調査を実施することとなった。

調査は敷地内の西部に120㎡の調査区（1区）と80㎡の調査区（2区）を設定し、平成22年4月5日から調査を開始した。1区は平安時代を第1面、2区は平安時代中期を第1面、平安時代前期を第2面として調査を行った。その結果、上述した京都監獄の大規模な整理土坑により、大きく攪乱を受けてはいたが、2区南部で東西に平安時代前期の建物跡に伴う柱穴列、南北方向の区画溝を確認することができた。



図3 調査前全景（東から）



図4 作業風景（西から）

2. 周辺の調査

調査地周辺で行われた発掘調査および試掘・立会調査は一覧表（表1）のとおりである。周辺調査位置図（図5）から、これまで発掘調査された地点は、中務省跡北半部に集中しており、中務省正庁域・陰陽寮域は少ない。特に陰陽寮域の調査は立会調査を除き東部に限られている。また、南半部では立会調査以外は実施されていないのが現状である。ここでは中務省跡南半部における、当調査地と関連する遺構の概略を述べておく。

丸太町通に南接する過去の調査において、中務省正庁域では、東西の区画溝が連続して検出されている。調査1（1978年度）に始まり、調査7（1982年度）、調査8（1986年度）、調査11（1989年度）で約120mに渡り東西に検出されている。中務省東部の陰陽寮域にあたる調査18（1992年度）でも、その延長ラインに溝が検出されている。これらの溝は中務省を南北に区画する溝と推定される。その調査地の東、陰陽寮東限域と推定される試掘調査21（1990年度）では南北方向の溝を2箇所に渡り検出している。この溝は東面築地の外溝と考えられる。建物跡の検出には調査9（1989年）、調査30（2005年度）があげられる。調査9で検出した東西掘立柱建物は、調査30で検出した建物に延長することが確認できた。また、調査30では西面築地推定線上で築地跡も検出している。立会調査（22）では、44地点で南面築地外溝と考えられる東西溝を検出している。114地点では南北方向に溝を検出しており、中務省正庁域と陰陽寮域を区画する溝と推定される。また、46地点でも南北溝を検出しており、これらの溝は、中務省北半部に該当する調査2（1978年度）で検出した、東西溝の南折部分に延長していくものと推定される。

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査方法	調査年度	調査推定地	主要遺構	主要遺物	文献
1	発掘	1978	正庁域	土坑	平安時代一括土器・硯	1
2	発掘	1978	監物	北面築地内溝・区画溝・東西建物	文字瓦・硯	1
3	発掘	1979	内舎人	北面築地内溝・東西掘立柱建物・東西礎石建物	軒瓦	2
4	発掘	1979	内舎人	北面築地内溝・東西礎石建物(基壇)・土坑、(古墳:土坑)	墨書土器「内舎人」	19
5	発掘	1980	内舎人	北面築地内溝・南北区画溝・東西掘立柱建物	軒瓦・緑釉・緑釉火舎・瓦・墨書土器「口省」	3
6	発掘	1981	内舎人・監物・鈴鑰	掘立柱建物・南北溝、(古墳後:竪穴住居跡)	軒瓦・緑釉瓦	19
7	発掘	1982	正庁域	東西区画溝	瓦多量	4
8	発掘	1986	正庁域	東西区画溝・土坑	軒瓦・文字瓦・硯	9
9	発掘	1989	正庁域	掘立柱建物・土坑	軒瓦・文字瓦・緑釉火舎	11
10	発掘	1989	鈴鑰	北面築地内溝・南北築地両側溝・東西掘立柱建物、(古墳後:竪穴住居跡)	軒瓦・文字瓦・墨書土器・緑釉火舎・人面高杯・硯	17
11	発掘	1989	正庁域	東西区画溝・柱穴・土坑・瓦溜	軒瓦・文字瓦・緑釉瓦・鷗尾	11
12	発掘	1990	内舎人・監物	北面築地内溝・南北築地および両側溝・暗渠・柱穴・土坑	軒瓦・文字瓦	13
13	発掘	1990	北面築地	北面築地外溝・路面、(古墳後:土坑)	軒瓦	14
14	発掘	1991	北面築地	北面築地外溝・路面、(古墳後:土坑)	軒瓦	14
15	発掘	1991	内舎人	北面築地および内溝・西面築地および内外溝・暗渠・柱穴	軒瓦・硯	14
16	発掘	1991	中務省隣接地	整地層		14
17	発掘	1992	内舎人	北面築地内溝・東西掘立柱建物・東西礎石建物、(古墳後:竪穴住居跡・柱列・土坑)	軒瓦・墨書土器「監」	15
18	発掘	1992	陰陽寮	東西区画溝・土坑	軒瓦	16
19	発掘	1994	西面築地	西面築地・外溝		18
20	発掘	1994	東面築地	東面築地・内外溝		19
21	試掘	1990	東面築地	南北溝		12
22	立会	1979	朝堂院・太政官・中務省	南面築地外溝・基壇状遺構・柱穴・溝		19
23	立会	1980	内舎人	遺物包含層		19
24	立会	1983	正庁域	遺物包含層		5
25	立会	1983	南面築地	遺物包含層		6
26	立会	1985	中務省隣接地	遺物包含層		7
27	立会	1986	陰陽寮	南北溝		8
28	立会	1989	西面築地	築地外溝		17
29	立会	1989	西面築地	土坑		10
30	発掘	2005	正庁域	西面築地基底部・南北掘立柱建物・土坑	緑釉火舎・軒瓦・文字瓦	20

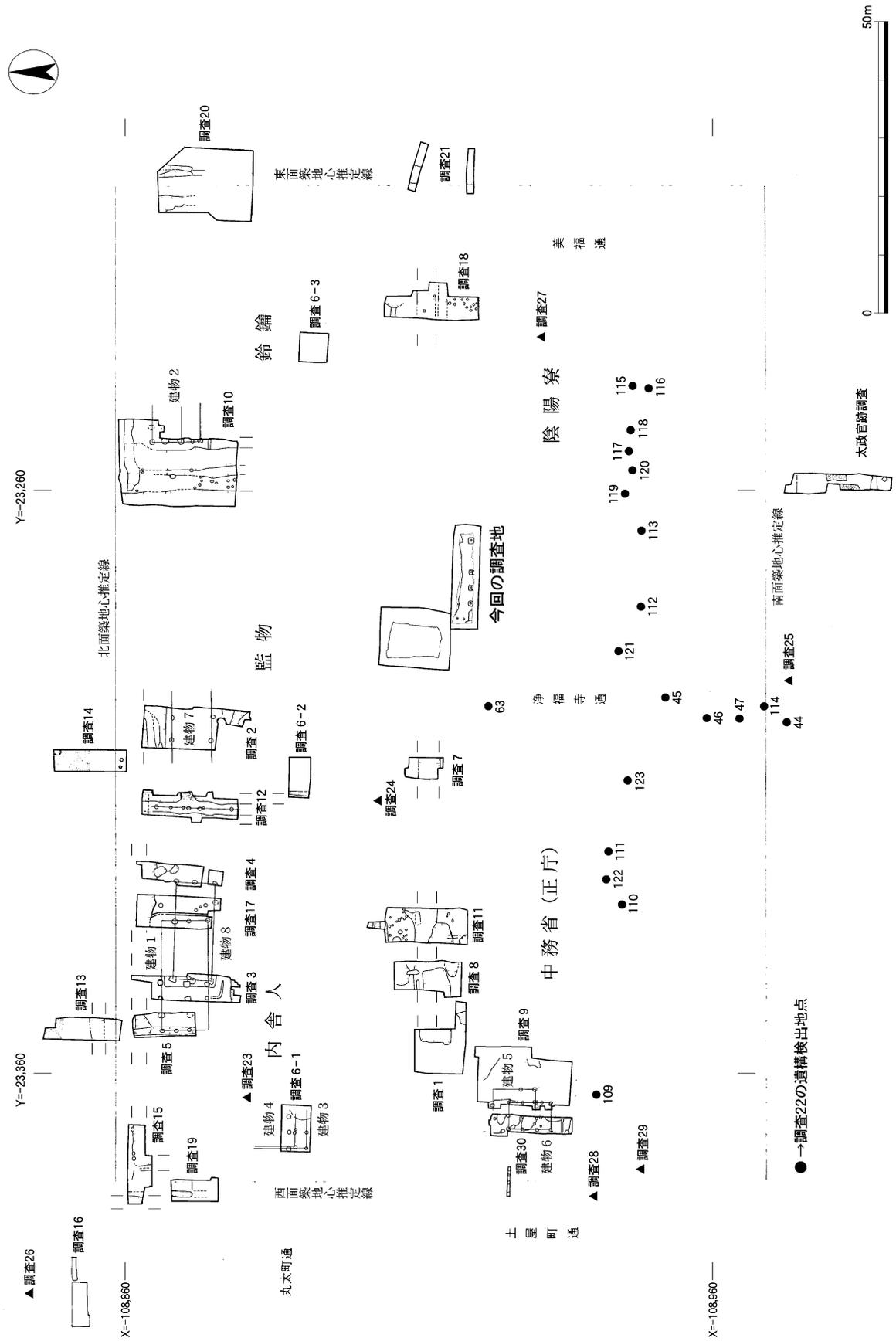


図5 周辺調査位置図 (1 : 1,000)

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査区は大規模な造成により盛土されている。ただし、この周辺は北側、丸太町通から南側へ緩やかに下がる地形であるため、敷地北側の盛土は薄い、南側には厚く盛られている。

1区の基本層序は、西部で厚さ約0.8mの近現代盛土層の下に、約0.4～1.0mの明治時代の監獄整理土層が調査区全体に重層して堆積し、その下は江戸時代後期の土取土坑の埋土（褐色粘質土）が約0.3～0.8mと南に緩やかに下がり堆積する。その直下が第1面調査面とした明黄褐色粘質土層上面（地山）である。地表から1.6～2.0mを測る。東半部は聚楽土までも削平され、地表下約2.0mで明黄褐色砂礫層（地山）となる。

2区の基本層序は、厚さ約1.0mの近現代盛土の下に、約0.1mの江戸時代後期の整地層（にぶい黄褐色砂泥層）が堆積し、その下に約0.2～0.3mの平安時代中期から後期の整地層・包含層（にぶい黄褐色砂泥粘質土）が堆積する。これらの堆積層は、調査区内では攪乱により削平されていた。その下層に約0.1mで固く締まった整地層（褐色粘質土）が、攪乱を免れて遺存することから、この面を第1面（平安時代中期以降）として調査を始めた。それ以下が第2面とした明黄褐色粘質土層上面（地山）となり、建物跡・溝・土坑などが成立する。第2面は、地表下約1.4～1.6mを測る。

(2) 1区 第1面 江戸時代後期（図6、図版1）

明治時代の京都監獄関連の整理土坑により大半は攪乱を受けており、北西部と南東部に削平を免れた明黄褐色粘質土層上面で、江戸時代後期の遺構を確認した。これらは京都所司代屋敷に関

表2 遺構概要表

地区	時代	主な遺構	概要
1区	江戸時代後期	土坑50	長円形の土坑。金箔瓦混入。 京都所司代屋敷関連の土取。
		土坑58	
		土坑61	
		土坑64	
2区	江戸時代後期	土坑21	井戸の可能性はある。
	平安時代中期	ピット2・3・7・8	小ピット。ピット7・8は明黄褐色粘質土（地山）面で検出。
	平安時代前期	ピット15・16・38	明黄褐色粘質土（地山）面で検出。L字状ピット3基。ピット15から埴出土。
		土坑27	建物1・溝28間に位置する。瓦片・炭化物が中量出土。
		溝28	陰陽寮西限の内溝に推定される。推定築地心から北肩2.8m。
	平安時代初頭～前期	柱穴22	建物1に柱筋が並ぶ。東にも延長する同一建物の可能性がある。
建物1		柱穴（13・14・18）が東西に2.7m（9尺）等間で、2間並ぶ。柱穴22に延長してさらに北に延びる可能性がある。	

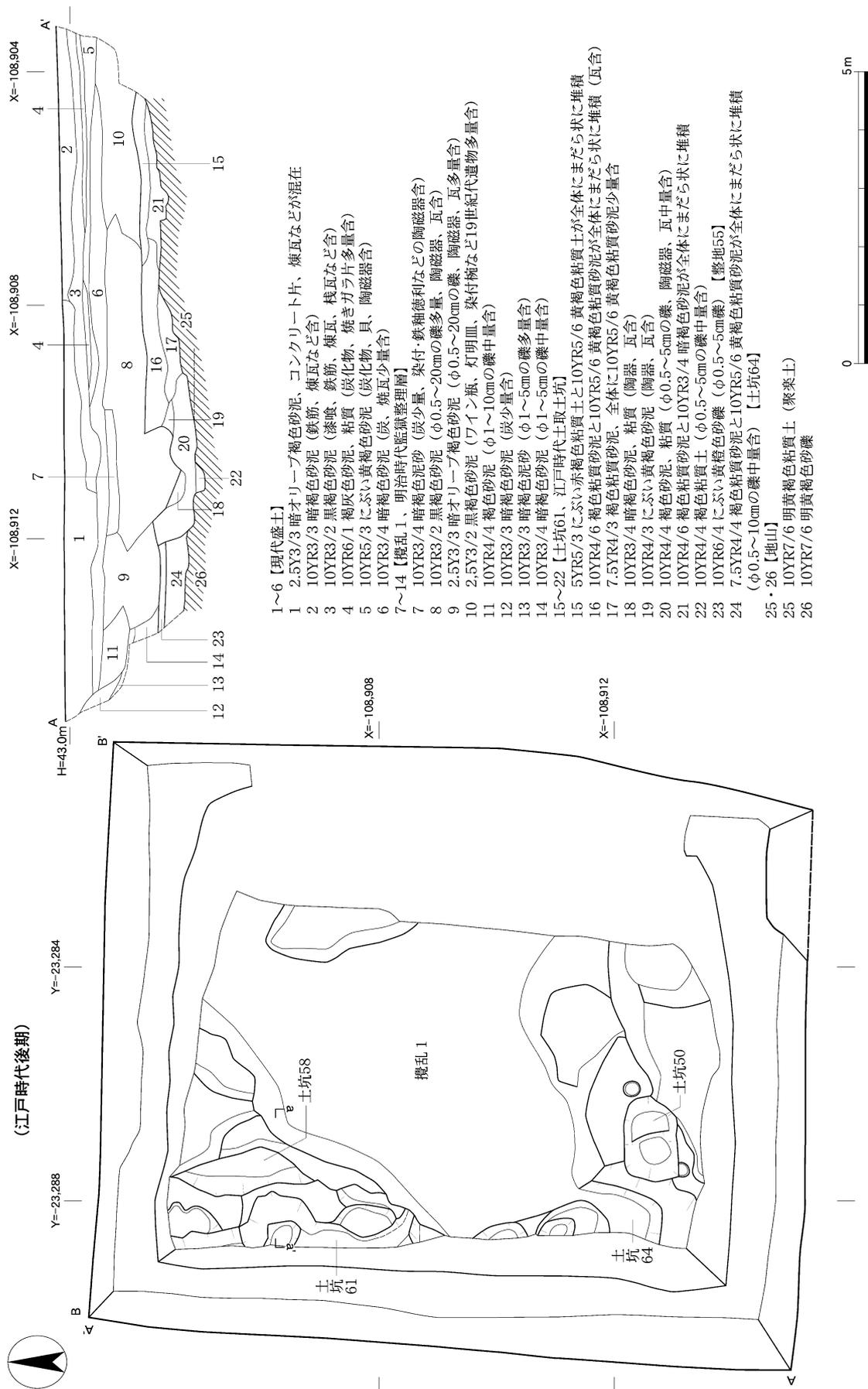
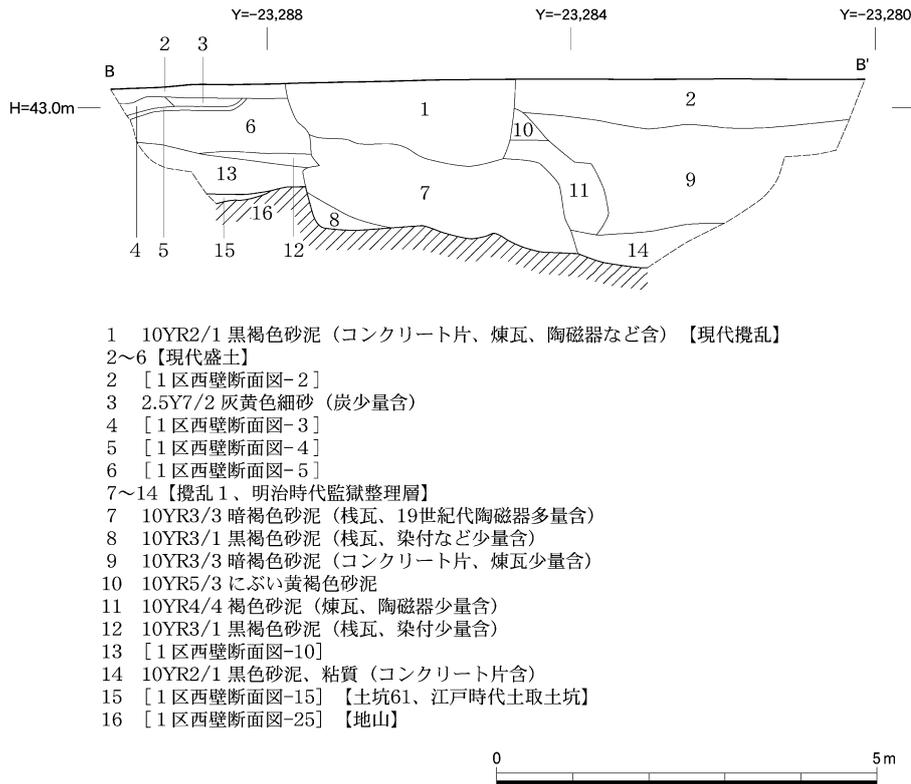


図6 1区第1面平面図・西壁断面図（1：100）

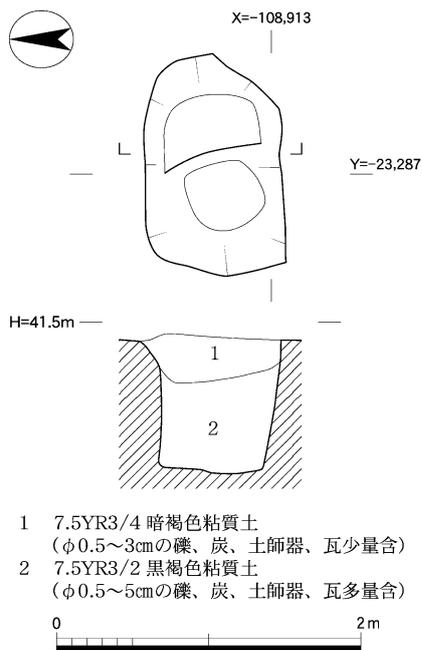


- 1 10YR2/1 黒褐色砂泥（コンクリート片、煉瓦、陶磁器など含）【現代攪乱】
- 2~6【現代盛土】
- 2 [1区西壁断面図-2]
- 3 2.5Y7/2 灰黄色細砂（炭少量含）
- 4 [1区西壁断面図-3]
- 5 [1区西壁断面図-4]
- 6 [1区西壁断面図-5]
- 7~14【攪乱1、明治時代監獄整理層】
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥（椀瓦、19世紀代陶磁器多量含）
- 8 10YR3/1 黒褐色砂泥（椀瓦、染付など少量含）
- 9 10YR3/3 暗褐色砂泥（コンクリート片、煉瓦少量含）
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 11 10YR4/4 褐色砂泥（煉瓦、陶磁器少量含）
- 12 10YR3/1 黒褐色砂泥（椀瓦、染付少量含）
- 13 [1区西壁断面図-10]
- 14 10YR2/1 黒色砂泥、粘質（コンクリート片含）
- 15 [1区西壁断面図-15] 【土坑61、江戸時代土取土坑】
- 16 [1区西壁断面図-25] 【地山】

図7 1区北壁断面図（1：100）

連する遺構と考えられる。中世・平安時代の遺構は皆無であった。

土坑 50（図8） 調査区の南西部で検出した長円形の土坑である。規模は東西約 1.4 m、南北約 1.0 m、深さは約 0.9 mを測る。埋土は上層に暗褐色粘質土、下層に黒褐色粘質土が堆積する。遺物は 18 世紀後半から 19 世紀前半の椀瓦、施釉陶器、磁器、焼締陶器、埴塼などが出土している。



- 1 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
（φ0.5~3cmの礫、炭、土師器、瓦少量含）
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
（φ0.5~5cmの礫、炭、土師器、瓦多量含）

図8 土坑 50 実測図（1：50）

混入遺物には金箔瓦（図 24）、輸入青磁壺、凝灰岩石材片（図 25）などがある。

土坑 58（図 9・10） 調査区の北西部で検出した。東部は攪乱され、西肩のみの検出である。規模は南北約 2.2 m、東西約 0.8 mである。深さは約 0.2 ~ 0.3 mで東に向かって落ち込む。埋土は暗褐色粘質土が堆積する。遺物は 18 世紀後半から 19 世紀前半の伊万里染付が出土している。

土坑 61（図 9・10） 前述の土坑 58 に西接して検出した。南北に長軸をもつ不定形な土坑で土取穴と考えられる。西肩は調査区外となり、東肩のみの検出である。規模は南北約 7.6 m、東西約 0.2 ~ 0.7 m、深さは約 0.4 ~ 0.8 mで南に向かって深くなる。埋土は褐色粘質土が主体となり堆積する。遺物は 18 世紀後半から 19 世紀前半の椀瓦、施釉陶器、磁器などが出土している。



図9 土坑58・61(北から)

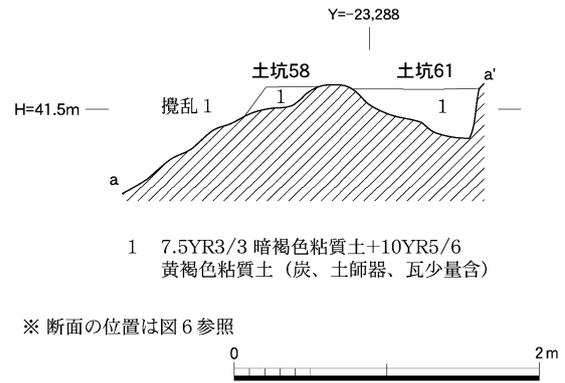


図10 土坑58・61断面図(1:50)

土坑64 調査区の南西部で検出した。土坑61同様に不定形な土取穴と考えられる。西肩は調査区外となる。規模は南北約1.6m、東西約0.9m前後、深さは約0.7mを測る。埋土は褐色砂泥粘質土に黄褐色の聚楽土ブロックがまばらに混じる。上層は埋めた後に小礫を埋め込み整地されている。遺物は18世紀後半から19世紀前半の棧瓦、施釉陶器、磁器などが少量出土している。

(3) 2区 第1面 平安時代中期以降(図11、図版1)

1区と同様に京都監獄関連の整理土坑により大半は攪乱を受けていた。調査区南壁から以北が削平された状態であったが、平安時代中期の整地層が南壁際に、東西に遺存していた。その整地面と攪乱により露出した明黄褐色粘質土層(地山)上面での検出遺構である。遺構には江戸時代後期の土坑、平安時代中期の土坑、ピットを少数検出している。

土坑21 調査区東部の南壁沿いに検出した円形土坑である。掘削当初は平安時代の瓦片が出土することから、この平安時代の遺構として捉えていたが、後に江戸時代後期の遺構と確認した。京都所司代屋敷関連の遺構であろう。規模は径が約1.0m前後、深さは南壁断面のからは2m以上を測る。埋土は褐色砂泥粘質土に黄褐色の聚楽土ブロックが混入する。検出面から約0.3mで、長軸0.8m、短軸0.4mの自然石が埋没していた。壁際での深い掘削は危険と判断し完掘はしていないが、形態・深さから石組を抜き取られた井戸である可能性が高い。遺物は18世紀後半から19世紀前半の施釉陶器、伊万里染付が少量出土している。

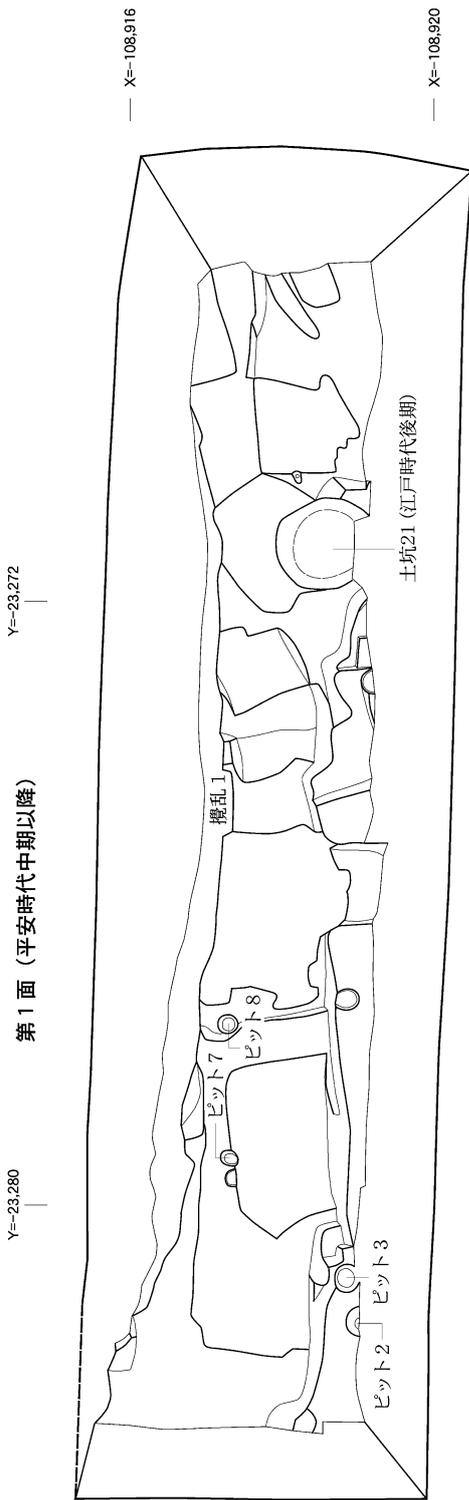
ピット2 調査区西部の南壁沿いに検出した小ピットで、平安時代中期の整地層に切り込んで遺存する。南半部は調査区外となる。規模は径が約0.5m、深さは約0.35mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥が堆積する。遺物は11世紀代の土師器皿が少量出土している。

ピット3 調査区西部の南壁沿いで検出した円形のピットで、平安時代中期の整地層に切り込んで遺存する。規模は径が約0.35m、深さは約0.2mを測る。埋土は褐色砂泥が堆積する。遺物は11世紀代の土師器皿が少量出土している。

ピット7・8(図14) 調査区西部で検出した。東西方向に1.8m(6尺)間隔で並ぶ円形の小ピット2基である。共に規模は径が約0.25m前後、深さは約0.1mを測り浅い。埋土は黄褐色砂泥が堆積し、遺物はピット7から須恵器杯が、ピット8からは11世紀代の土師器が少量出土して



陰陽寮域
中務省正庁域



陰陽寮域
中務省正庁域

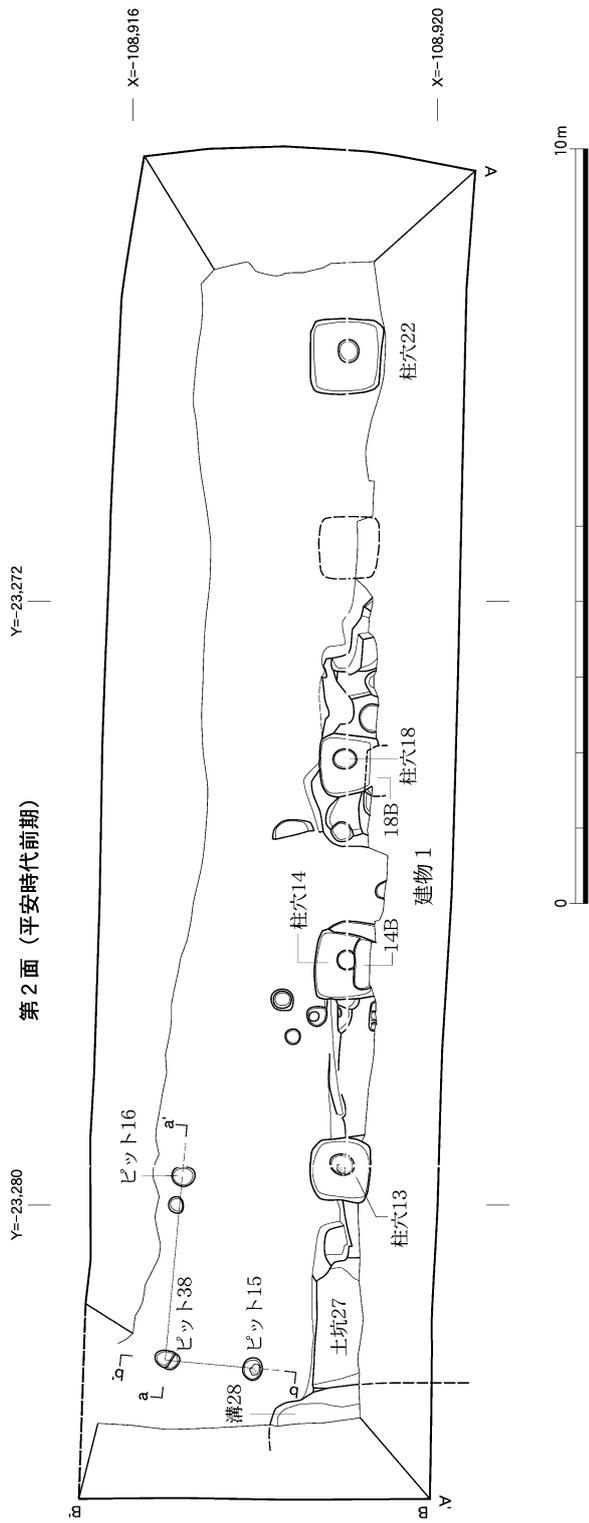
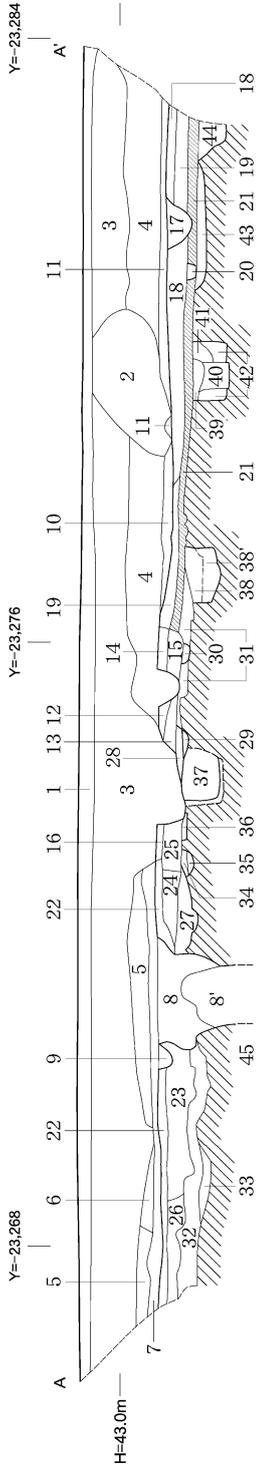


図11 2区第1・2面平面図 (1:100)



- 1 碎石
- 2 現代擾乱
- 3 現代盛土
- 4 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.5~5cmの礫少量、炭、土師器含)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~15cmの礫中量、瓦含)
- 6 10YR2/1 黒色泥砂 (φ0.5~5cmの礫中量含)
- 7 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.5~10cmの礫)
- 8・8' 【土坑21】
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~15cmの礫多量、瓦含)
- 8' 7.5YR4/6 褐色粘質土、固く締まる (φ0.5~15cmの礫少量、炭、土師器、瓦含)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~3cmの礫少量含)
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ0.5~10cmの礫少量、炭、土師器、瓦含)
- 11 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~5cmの礫少量、土師器含)
- 12 10YR4/6 褐色砂泥、よく締まる (φ0.5~3cmの礫多量含)
- 13 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.5~3cmの礫少量含)
- 14 7.5YR4/3 褐色砂泥、粘質 (土師器含)
- 15 10YR4/6 褐色粘質土、固く締まる (φ0.5~5cmの礫少量、炭、土師器、瓦含)
- 16 10YR4/6 褐色砂泥、よく締まる (φ0.5~3cmの礫多量含)
- 17 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.5~7cmの礫少量含) 【ピット2】
- 18 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、粘質 (土師器含) →包含層
- 19 10YR4/4 褐色粘質土、固く締まる (φ0.5~3cmの礫少量、炭、土師器含) →包含層
- 20 10YR4/6 褐色粘質砂泥 (土師器小片含) 【ピット3】
- 21 7.5YR4/6 褐色粘質土、固く締まる (炭、土師器、瓦含) →第1面整地層 (11世紀代)
- 22 10YR3/4 暗褐色砂泥、よく締まる (φ0.5~3cmの礫少量、炭、土師器含)
- 23 10YR3/4 暗褐色砂泥 (φ0.5~5cmの礫少量、炭、土師器含) →包含層
- 24 10YR4/6 褐色砂泥、よく締まる (φ0.5~7cmの礫中量含)
- 25 10YR5/6 黄褐色砂泥
- 26 10YR4/4 褐色砂泥、よく締まる (φ0.5~5cmの礫少量、土師器中量含) →包含層
- 27 10YR4/4 褐色粘質土、固く締まる (土師器含) 【土坑20】
- 28 7.5YR4/4 褐色粘質土、固く締まる (土師器小片含) 【土坑29】
- 29 7.5YR4/4 褐色粘質土、固く締まる+7.5YR4/3 褐色粘質土、固く締まる 【ピット30】
- 30 10YR4/4 褐色粘質砂泥 (土師器含) 【ピット23】
- 31 7.5YR4/4 褐色粘質土、固く締まる
- 32 7.5YR3/3 暗褐色粘質土、固く締まる (φ0.5~5cmの礫少量、炭、土師器、瓦含)
- 33 10YR4/6 褐色粘質土、固く締まり均質
- 34・35 【ピット19】
- 34 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土 (小礫含)
- 35 7.5YR5/3 にぶい黄褐色粘質土、7.5YR5/9 明褐色粘質土含
- 36 10YR3/4 暗褐色砂泥、粘質 【ピット31】
- 37 7.5YR3/2 黒褐色粘質土、7.5YR5/6 明褐色粘質土含 【抜き取り穴】
- 38・38' 【柱穴14】
- 38 10YR7/6 明黄褐色粘質土と10YR3/4 暗褐色粘質土がまだら状に堆積、聚楽土少量含 (抜き取り穴土層か)
- 38' 38よりも聚楽土多量含 (抜き取り穴土層か)
- 39~42 【柱穴13】 <南へ約10cmで聚楽土の北肩検出>
- 39 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 40 10YR3/3 暗褐色と10YR6/6 明褐色粘質土がまだら状に堆積
- 41 10YR5/6 黄褐色粘質土、10YR3/3 暗褐色粘質土少量含
- 42 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土、10YR3/3 暗褐色粘質土ブロック含
- 43 7.5YR4/4 褐色粘質土 (炭、土師器、瓦含) 【土坑27】
- 44 10YR4/6 褐色粘質土 (土師器中量、瓦多量含) 【溝28】
- 45 10YR7/6 明黄褐色砂泥 (聚楽土) 【地山】 →第2面検出面

図 12 2 区 地層断面図 (1 : 100)

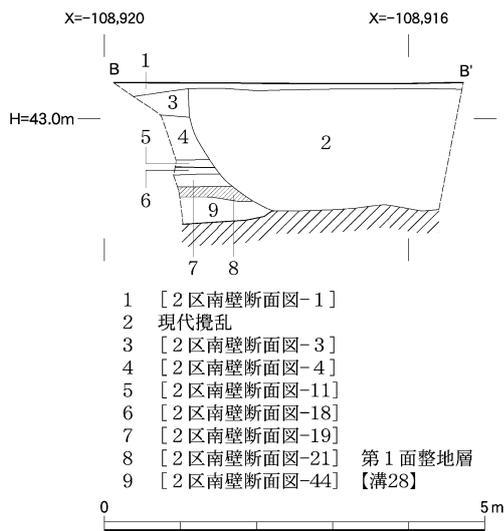


図13 2区西壁断面図 (1:100)

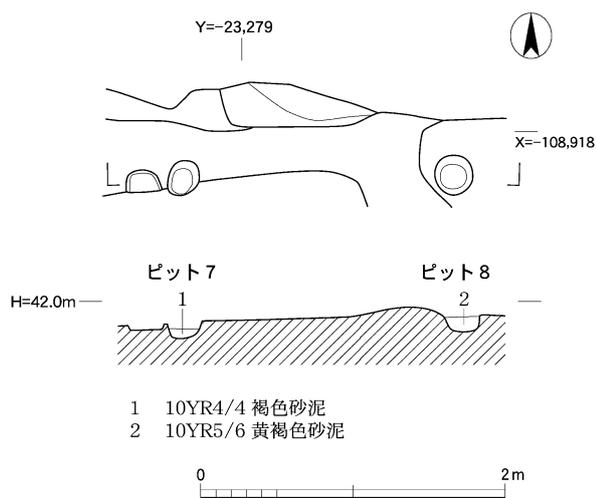


図14 ピット7・8実測図 (1:50)

いる。これらピット7・8は、明黄褐色粘質土層（地山）上面検出となる。深度が浅いことから上部は深く削平を受けたものと考えられる。

(4) 2区 第2面 平安時代前期 (図11、図版2)

南壁際の平安時代中期の整地層を掘り下げた後の明黄褐色粘質土層（地山）上面での検出遺構となる。遺構には平安時代前期の建物跡（東西柱穴列）、土坑、柱穴などがある。

ピット38・16・15 (図15) 調査区西端部で検出した円形のピット列である。北に向かって約5°東へ傾き、L字状に位置する。柱間は東西約2.4m (8尺)、南北約1.2m (6尺)。掘形の規模は径約0.25m前後、深さは約0.15m前後を測り浅い。埋土はにぶい褐色粘質土が堆積する。遺物は少量の土師器小片が出土しており、ピット15からは上面に火を受けた痕跡のある埴が、平坦面を上方に、遺構に納まる状態で出土している。遺構の性格は不明である。遺物は埴以外では細片ではあるが、9世紀末の土師器が出土している。

土坑27 (図16) 調査区西部の南壁際で検出した浅い落込みである。規模は東西約1.7m、南

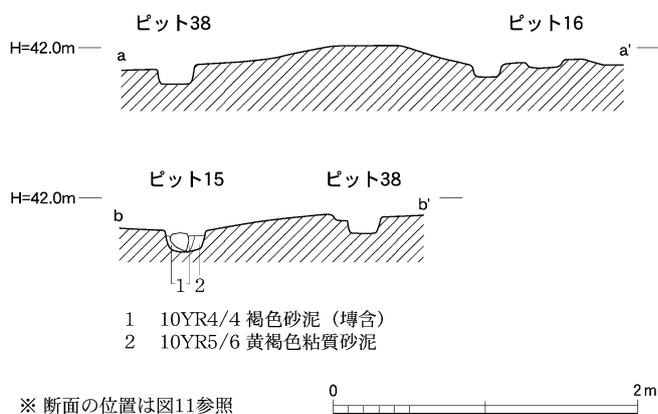


図15 ピット38・16・15断面図 (1:50)

は調査区外、北は攪乱の削平を受け約0.6mの残存幅を測る。深さは約0.15mである。埋土は瓦片を多量に含んだ褐色粘質土で、遺物は柱穴の出土遺物より時期が新しく、9世紀末の土師器皿、瓦などが少量出土している。

溝28 (図16、図版2) 調査区西端部の南壁際で検出した溝で、土坑27西に隣接する。東肩部の検出で、

西半・南半部共に調査区外となり、正確な規模は不明である。断面形態は逆台形状で、残存規模は東西が幅約 0.5 m、南北 1.2 m で、深さは約 0.4 m を測る。この溝は陰陽寮域と中務省正庁域の境界施設に関連する溝の可能性がある。埋土は瓦片・炭化物を含んだ褐色粘質土である。遺物は 9 世紀末の土師器皿、須恵器杯・壺が少量出土している。

建物 1（柱穴 13・14・18）（図 17、図版 2・3）調査区の南壁際に大型の掘立柱建物跡を、東西に 5.4 m（2 間

分）を検出した。柱間は 2.7 m（9 尺）の等間隔である。掘形の形態はいずれも隅丸方形で、規模は一辺約 0.85 m 前後、深さは約 0.3 ～ 0.5 m である。柱痕跡の規模は径約 0.3 m で、深さは約 0.2 ～ 0.3 m を測る。柱穴 13 は柱痕跡が不定形である。柱穴 14・18 は調査区南壁拡張の結果、柱穴に切り合う土坑（18B）、南から大きく掘り込まれた土坑（14B）が南接することが認められる。これら柱穴からは、いずれも柱本体の遺存は認められない。遺物は 9 世紀初頭の土師器碗・杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・甕、瓦などが少量出土している。なお、この建物は第 1 面の近世土坑 21 地点（柱穴 18 から東 2.7 m）に柱穴が存在していたとすれば、後述する柱穴 22 を含め調査区外まで延長する東西建物（4 間以上）となる可能性もある。また、北側は攪乱されているため、南北どちらに展開するかは不明である。

柱穴 22（図 17、図版 2・3）調査区の南端部で検出した。建物 1 と柱筋を同じくする掘立柱建物の柱穴で、掘形上部は深く削平を受けている。建物 1 の柱穴 18 からは西へ 5.4 m（18 尺）に位置する。掘形の形態は隅丸方形で、規模は一辺約 0.95 m 前後である。建物 1 の柱穴より規模が若干大きくなる。柱痕跡の規模は径約 0.3 m で、深さは約 0.2 m である。遺物は 9 世紀初頭の土師器皿が少量出土している。

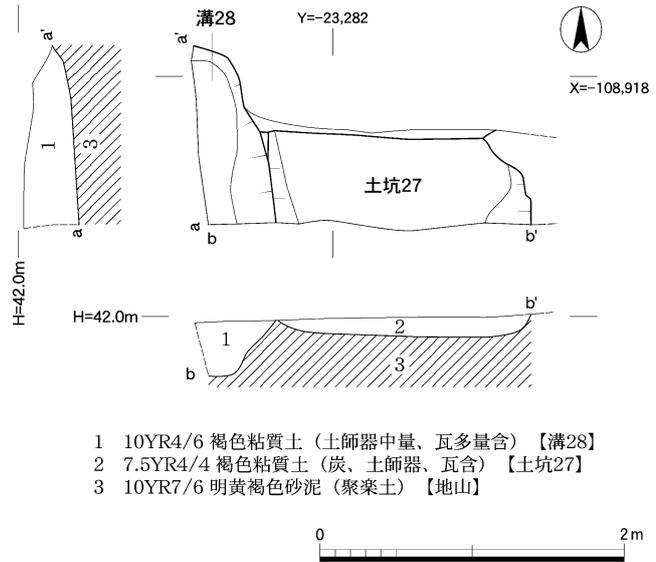


図 16 溝 28・土坑 27 実測図（1：50）

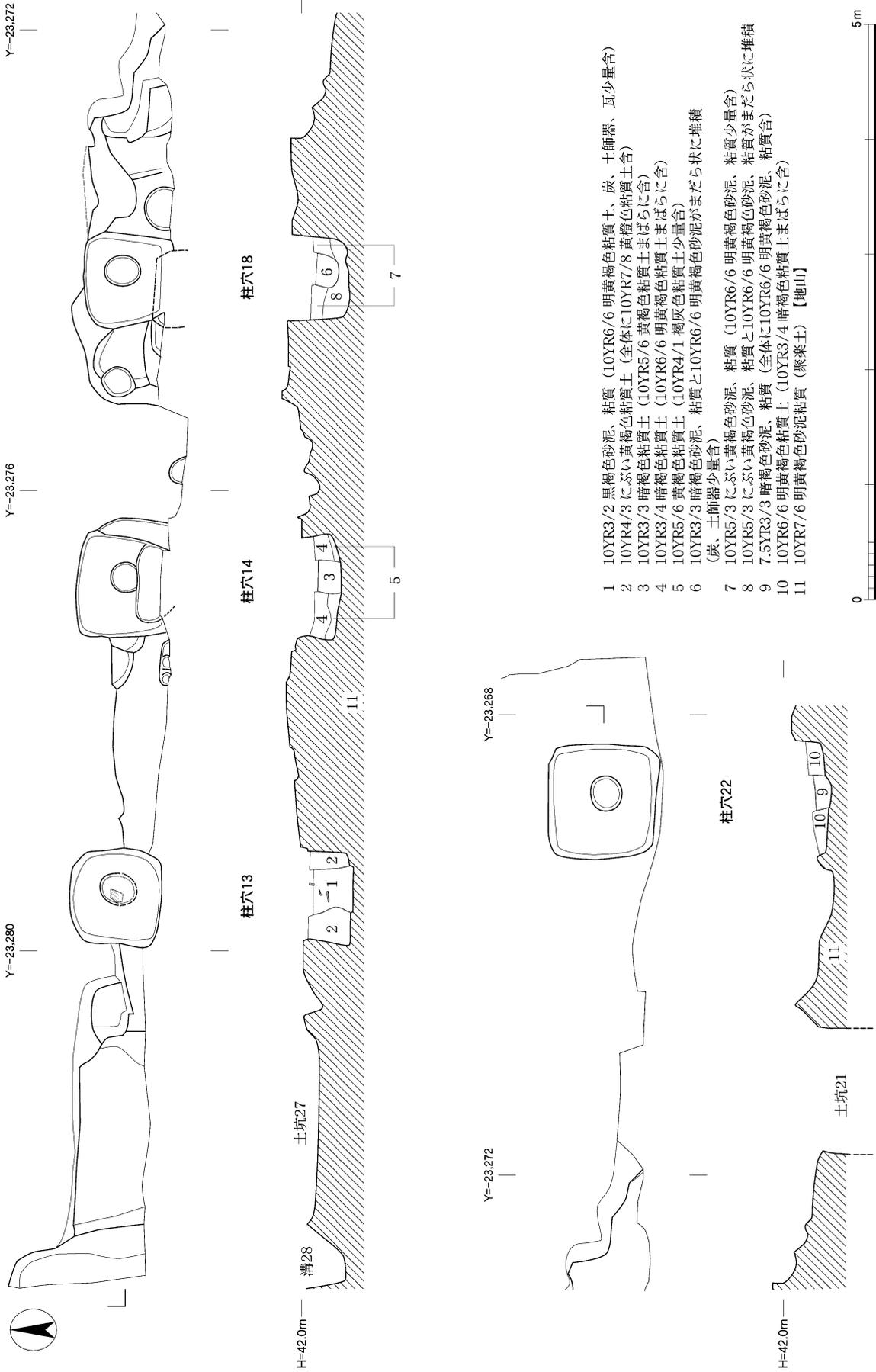


図 17 建物 1 東西柱穴列実測図 (1 : 50)

4. 遺物

本調査では平安時代の遺物は少量出土となった。平安時代中期の整地層・遺物包含層などに包含された土器類は細片が大半を占め、主要遺構からの出土も少量である。今回、検出できた中務省・陰陽寮に関連する遺構（建物1・土坑27・溝28）からの出土土器類は、一部を断面実測図（1/2スケール）として掲載をすることにした。これらは口縁部形態・成形手法の観察が可能としたものに限って実測を行っている。断面実測以外は1/4スケールである。以下遺物について概説する。

(1) 平安時代中期の遺物

整地層出土遺物（図18・19）南壁際における整地層（褐色粘質土層）掘り下げで出土した遺物である。出土遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・瓦などがあり、小片が大半である。図示できたものには須恵器鉢（1）、白色土器（2）、緑釉陶器皿（3）がある。1は鉢で口縁部が屈曲しない形態のもの。3は近江・美濃系の緑釉陶器皿である。軟質の胎土で濃緑色の釉が施され、貼付高台の内端面は窪み状を呈するものである。2は胎土がやや粗いが、白色土器と推定される器形不明の資料である。外面には格子状に深くミガキ調整が施されている。図示できなかったが土師器には、いわゆる「ての字状」口縁や2段ナデ調整の皿などが見られることから、11世紀代（IV期）に属するものと考えられる。

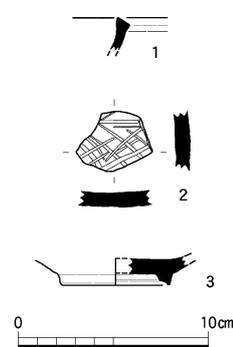


図18 整地層出土土器実測図（1：4）

(2) 平安時代前期の遺物

土坑27出土土器（図20、図版4）出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、図示できたものには土師器杯（4～7）がある。これらは口縁部が直線的に上方へ延びるもの（5・6）、わずかに外反して丸く収まるもの（4・7）に分類できる。いずれも口縁端部は丸く収められ、内面から口縁部にかけてナデ調整が、体部はオサエ調整が施される。ヘラケズリ調整は認められない。これら出土遺物はII期中～新に属するものと考えられる。



図19 整地層出土白色土

溝28出土土器（図20）出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、図示できたものには須恵器壺の口頸部（8）がある。口縁

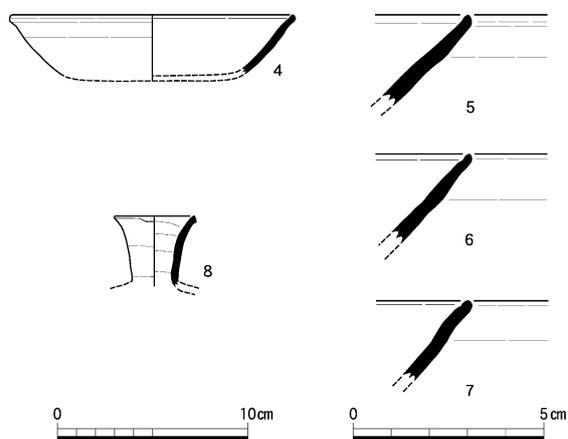


図20 土坑27・溝28出土土器実測図（1：4、1：2）

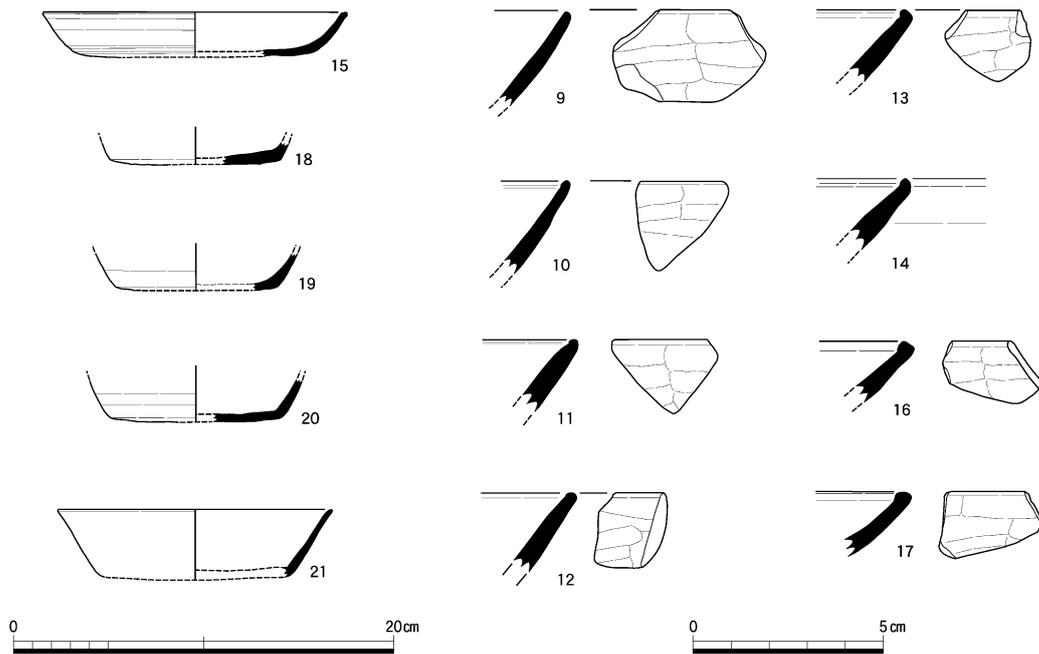


図 21 建物 1 柱穴出土土器実測図 (1 : 4、1 : 2)

部は外反して、端部を一部指で緩く折り曲げている。Ⅱ期中～新に属するものと考えられる。

建物 1 出土土器 (図 21・22、図版 4) 出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・瓦などがあり、図示できたものには土師器碗 A (9・10)・杯 (11～14)・皿 X (15)・皿 A (16・17)、赤色顔料付着の土師器 (22)、須恵器杯 A (18～21) がある。碗 A は口縁端部が丸く収められ、外面調整にケズリ調整が施される。皿 X は京域外生産の土師器皿で、産地を摂津方面に推定される資料である。内外面に丁寧なナデ調整が施され、外面は 3 単位でのナデ調整が顕著に残る。生産地が京域以外では、図示できなかつたが河内産に推定される土師器甕の小片が 1 点出土している。皿 A は肥厚した口縁端部が内に収められ、磨滅したものではあるが、外面調整にはケズリ調整が認められる。杯は口縁端部が丸く収められるもの (12)、小さく丸く内に収められるもの (11)、肥厚した口縁部が内に収められるもの (13・14) がある。いずれも磨滅したものではあるが、13 は外面調整にケズリ調整が認められる。14 はケズリ残しで、ナデ調整である。22 は蓋か碗の口縁部である。外面口縁部に赤色顔料が塗られている。須恵器杯 A は、いずれも軟質で焼成不良品である。18 はヘラ切り痕が残る。体部が残存する (21) は、器壁が薄く、シャープに成形され、口縁部はわずかに外反する。



図 22 建物 1 出土赤色顔料付着土師

上述した土師器 (碗・皿・杯) は、明らかに土坑 27 出土の土師器とは、調整方法に違いが認められることから、Ⅰ期新～Ⅱ古に属するものとする。

表3 土器一覧表

番号	器種・器形	遺構名	口径	器高	底径	器色色調	断面色調	残存	備考
1	須恵器鉢	1区 南西隅整地層				灰色		破片	
2	白色土器	2区 第1面掘下				浅黄橙色		破片	表面に強いヘラミガキを施す
3	緑釉陶器皿	2区 第1面掘下			5.8	釉-濃緑色	胎土-淡黄色	破片	近江・美濃系
4	土師器杯	2区 土坑27	15.0			にぶい橙色		10%	口縁部
5	土師器杯	2区 土坑27				にぶい橙色		破片	磨滅激しい
6	土師器杯	2区 土坑27				にぶい橙色		破片	
7	土師器杯	2区 土坑27				浅黄橙色		破片	磨滅激しい
8	須恵器壺	2区 溝28	4.3			灰色		破片	
9	土師器椀A	2区 建物1 (柱穴18)				橙色		破片	掘形出土
10	土師器椀A	2区 建物1 (柱穴18)				橙色		破片	磨滅激しい 掘形出土
11	土師器杯A	2区 建物1 (柱穴18)				にぶい橙色		破片	
12	土師器杯A	2区 柱穴22柱当				橙色		破片	磨滅激しい
13	土師器杯A	2区 建物1 (柱穴18)				橙色		破片	
14	土師器杯A	2区 建物1 (柱穴18)				淡赤橙色		破片	
15	土師器皿X	2区 建物1 (柱穴18)	16.0	2.4		橙色		10%	摂津産
16	土師器皿A	2区 建物1 (柱穴18)				橙色		破片	磨滅激しい
17	土師器皿A	2区 建物1 (柱穴18)				橙色		破片	
18	須恵器杯	2区 建物1 (柱穴14)			9.0	灰白色		25%	底部 磨滅激しい
19	須恵器杯A	2区 建物1 (柱穴18)			10.0	灰白色		15%	底縁部 磨滅激しい
20	須恵器杯A	2区 建物1 (柱穴18)				灰白色		25%	底部 磨滅激しい 掘形出土
21	須恵器杯A	2区 建物1 (柱穴13)	14.5			灰白色		15%	体部 磨滅激しい 掘形出土

(3) 瓦類

瓦類は近世土坑、近現代攪乱、溝27などから出土しているが、図示できたものは少ない。以下、主要な瓦・埴について述べる。

瓦1 (図23、図版4) 複弁蓮華文軒丸瓦である。下半部は欠損、周縁も欠損し磨滅が激しい。中房は圏線が廻り、蓮弁は盛り上がり幅が広い。蓮子数は1+5か。丸瓦部は凸面全体に縦方向のケズリ。瓦当部成形法は裏面上部に丸瓦を挿入して、粘土を付加してする接合式である。第1面整地層から出土している。平城京からの搬入品か。

瓦2 (図23、図版4) 均整唐草文軒平瓦の小片である。唐草文は両側に3回転するものか。唐草文単位は離れ、主葉は強く巻き込む。外区の界線は残存するが珠文範囲は欠損している。瓦当面は二次焼成を受け橙色に変色している。第1面整地層から出土している。平安時代前期に属する。

瓦3～5 (図23、図版4) 緑釉丸瓦である。瓦3は残存最大幅8.0cm、厚さ2.2cm、瓦4は現存最大幅6.0cm、厚さ2.0cm、瓦5は現存最大幅7.0cm、

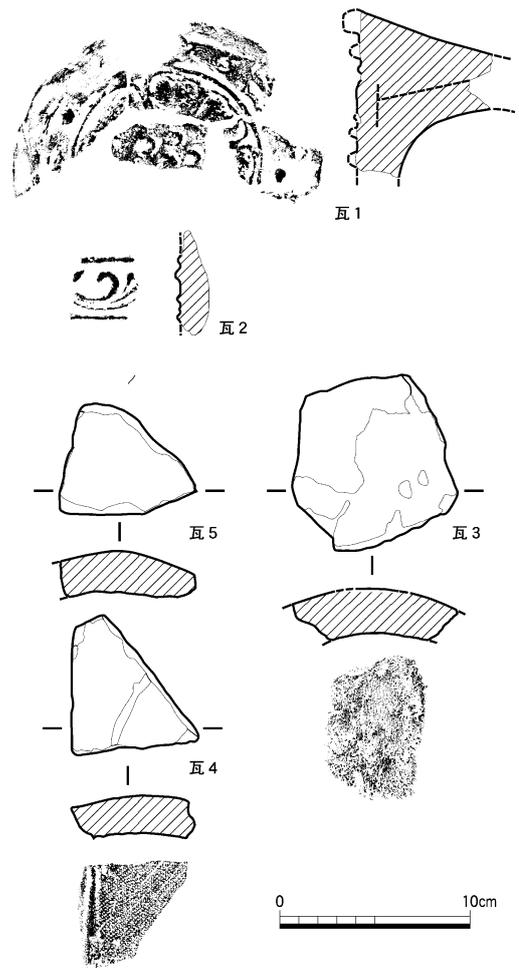


図23 平安時代の瓦拓影・実測図 (1:4)

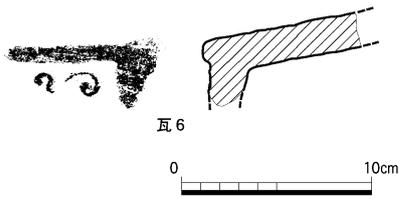


図24 桃山時代の瓦拓影・実測図（1：4）



図25 桃山時代の瓦

厚さ 2.1 cm, いずれも胎土は砂粒を含む軟質で, 胎土色調は浅黄橙色と灰白色がある。凸面には緑灰色の釉が施される。瓦3は凹面の布目は縦方向に擦り消される。瓦4はきめ細かい布目があり、一部が側面にまで及ぶ。攪乱1から出土している。平安時代前期に属する。

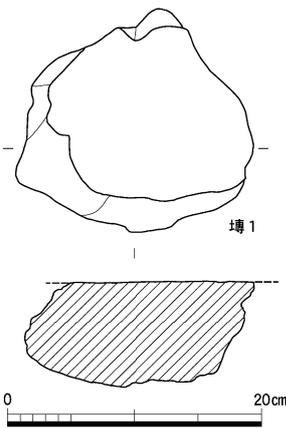


図26 埴実測図（1：6）

瓦6（図24・25）瓦当面に金箔を施した唐草文軒平瓦である。中心飾りは欠損しているが、唐草文は両側に2回転するものであろう。唐草文単位は大きく離れ、主葉は強く巻き込む。検出時には金箔の痕跡が外端の主葉部に見られたが、取上げ時に剥離している。土坑50から出土している。桃山時代に属する。

埴1（図26、図版4）残存最大幅 18.8 cm、残存厚 8.4 cm。上端面は丁寧にナデ調整が施される。周縁は欠損しているが、形態は方形を呈するものであろう。胎土は砂粒を含み軟質である。二次的焼成により、上面 1.5 cm幅で橙色に変色している。ピット15から出土している。

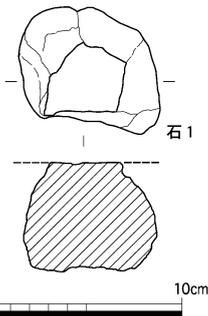


図27 凝灰岩実測図（1：4）

石1（図27、図版4）凝灰岩である。上面を残し大半が欠損している。残存最大幅 7.0 cm、残存厚 6.0 cm。二次的焼成により、上面 0.5 cm幅で灰色に変色している。土坑50から出土している。

（4）その他の遺物

石1（図27、図版4）凝灰岩である。上面を残し大半が欠損している。残存最大幅 7.0 cm、残存厚 6.0 cm。二次的焼成により、上面 0.5 cm幅で灰色に変色している。土坑50から出土している。

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、青磁、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、丸瓦、平瓦、埴、凝灰岩	10箱	土師器14点、須恵器6点、緑釉陶器1点、白色土器1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、緑釉瓦3点、埴1点、凝灰岩1点	10箱	0箱
桃山時代	金箔軒平瓦		金箔軒平瓦1点		
江戸時代後期以降	国産施釉陶磁器、瓦、土製品、石製品、輸入ガラス	2箱		2箱	0箱
合計		13箱	30点（1箱）	12箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. まとめ

今回の調査は中務省正庁と中務省に属する監物、陰陽寮域の調査となった。1区は平安時代の遺構は削平されて検出には至らなかったが、2区において建物跡・区画溝などを確認できた。これらは陰陽寮域の北西域に推定される場所に位置する。過去には陰陽寮域の調査は、北東部の2箇所で行われているが、建物跡の検出例はなかった。本調査が陰陽寮域での建物跡の検出初例となる。この章では今回の調査で明らかになった成果を述べてまとめとする。

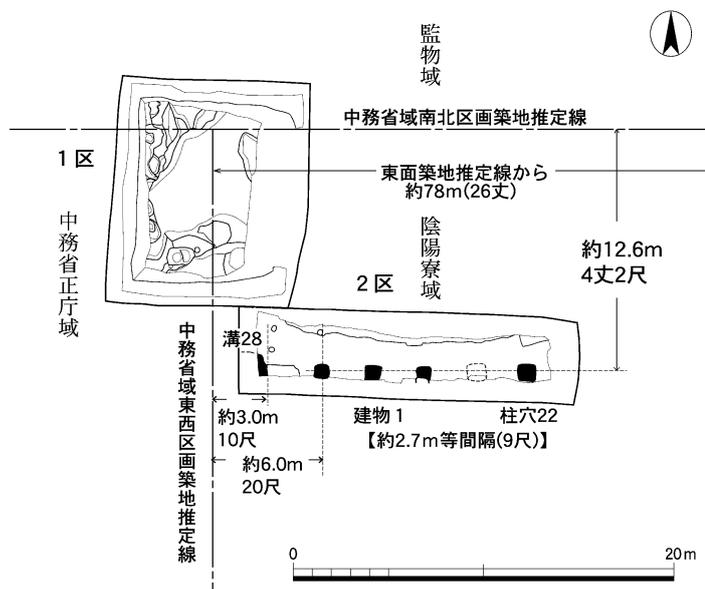


図28 中務省域内の遺構配置図（1：400）

今回の成果として建物跡（建物1・柱穴22）、区画溝（溝28）の検出できたことがあげられる。建物跡は先述したように東西に4間以上の建物になる可能性があり、柱穴掘形の形態、出土遺物などから、平安時代初頭期の大型建物であったと考えられる。位置的には中務省域の各区画推定心からの距離を導くと、中務省域の南北区画築地推定心から建物東西柱筋間は、南へ約12.6m（4丈2尺）を測る。中務省正庁域と陰陽寮域との東西区画築地推定心から、建物1西端の柱穴13間は約6.0m（20尺）を測る。溝28は一部を検出したにとどまったが、南北へ延長すると想定して、建物との位置関係は柱穴13から西へ約3.0m（10尺）の位置で東肩となり、前述の東西区画築地推定心からは東へ約3.0m（10尺）で同じく東肩に至る。これまで得られた中務省区画施設の調査成果から、調査12では南北築地の基底部を幅1.8m（6尺）、東側溝を幅約1.5m（5尺）検出している。西側溝は東肩の検出にとどまったが、同規模の溝として捉えて、築地区画施設幅は約4.8m（16尺）となる。調査10では築地幅が犬走り幅を含め、約3.0m（10尺）および東・西側溝を各幅約3.0m（10尺）検出しており、築地区画施設幅は約9m（30尺）となる。上記した調査12での成果数値を今回の調査に採用してみると、犬走り幅を含めて築地幅約1.8m（6尺）、溝幅各約1.5m（5尺）とした場合、築地施設幅が約4.8m（16尺）となり、築地推定心から溝外側までの距離約2.4m（8尺）が得られる。図28で示した東西区画推定心より溝までは約0.6m（2尺）西にずれることになるが、近値する位置となる。これらのことから、溝28は中務省域と陰陽寮域の東西区画施設の東側溝となり、その東に約3.0m（10尺）の空間を設けて建物1が配置されていたと考えられる。

中務省内は過去の調査から平安時代前期から後期にかけての遺構が多く検出され、出土遺物においても同様に貴重な資料が蓄積されている。今回の調査も含めて小規模な調査を積み重ねるこ

とにより、中務省の構造が徐々に明らかになりつつあることは間違いない。今回の調査成果も、それらの成果に新たな資料を加えられたものとする。今後、中務省・陰陽寮域での新たな成果に期待を寄せるものである。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 辻 裕司「平安宮中務省（1）」『杉山信三先生米寿記念論集平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993年

文献（表1 周辺調査一覧表）

- 1) 『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財概要集 1978 京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 2) 『平安京跡発掘調査概要』文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度 京都市文化観光局 1980年
- 3) 『平安京発掘調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財センター 1981年
- 4) 『平安京発掘調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
- 5) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局 1984年
- 6) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
- 7) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 8) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 9) 『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 10) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 11) 『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 12) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 13) 『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 14) 『平安京跡発掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
- 15) 『平安京跡発掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年
- 16) 『平安京跡発掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
- 17) 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 18) 『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1995年
- 19) 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 20) 『京都市内遺跡発掘調査報告』平成17年度 京都市文化市民局 2006年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうなかつかさしょうあと							
書名	平安宮中務省跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-1							
編著者名	大立目 一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうなかつかさしょうあと 平安宮中務省跡	きょうとしかみぎようく 京都市上京区	26100	2	35度 01分 05秒	135度 44分 42秒	2010年4月 5日～2010 年4月30日	200m ²	マンション 建設
じゅらくいせき 聚楽遺跡	しもたちうりどおりせんぼん 下立売通千本 ひがしいるなかつかさちよう 東入中務町 486番31他		237					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
聚楽遺跡	集落跡	平安時代	建物、柱穴、ピット、土坑、溝	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、青磁、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、丸瓦、平瓦、塼、凝灰岩				
平安宮中務省跡	宮殿跡	桃山時代		金箔軒平瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-1

平安宮中務省跡

発行日 2010年6月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961